

これまでに、世界15カ国で22の演出で137回『蝶々夫人』を歌い、演じ続けているオペラ歌手の大村博美さん。昨年9月には、東京の国立劇場で、東京二期会設立70周年記念公演で蝶々夫人を歌い、ブラボー！の声と万雷の拍手に包まれた。

「私が蝶々さんの役を初めて歌い演じたのは30代でした。世界の国々で様々な演出で歌い続けるうちに、この役は私の血肉となり、1番好きな役になりました」
世界的なオペラ歌手として舞台で歌っている時ではなく、ただ座って話しているだけの時も、大村さんは華やかな光を放つ。

『蝶々夫人』では、舞台に立つ着物姿の美しさでも注目を浴びてきた。

「実は、私の祖母が和裁学校の校長でしたので、小さい頃から着物を着た人達に囲まれて育ちました」

大村さんの祖母とは、徳島出身で吉井式和裁を確立した、故・吉井ツルエさん。長針を使った和裁の早縫い法を編み出し、吉井式和裁早縫専門学校を設立して全国に優れた和裁の技術を広めた。また、かつて徳島城の正門だったが徳島大空襲で焼失した鷲の門を、1989年、44年ぶりに徳島市制100年を記念して復元、寄贈した人でもある。

「祖母は明治生まれの気丈な阿波女でした。夫を戦争で亡くし、全国に大勢いた自分と同じ戦争未亡人の方々を助けるために、全国を旅して得意だった和裁の技術を広めたんです。日本中に分校や分教室ができ、東京に本校を設立して和裁の普及に努めました」

戦後、マッカーサー元帥夫人に「日本は戦争に負けましたが、まだ富士山が残っています」という手紙と共に富士山の柄の着物を贈って、日本人であることの誇りを示した事でも知られる。

「祖母はロサンゼルスまで行って和裁を教え、分校ができるほどでした。行動力とバイタリテイがある肝のすわった女性で、信念に向かってまっすぐ進む勇氣ある人でした」

子どもの頃、目黒に住んでいた大村さんは、練馬に邸宅を構えていた祖母の元によく遊びに行っていた。

「祖母の住まいには広い日本庭園があつて、錦鯉が泳ぐ大きな池が2つと母屋、和裁学校の校舎、生徒さん達の寮も建っていました」

皇室の方にも和裁を教えていた吉井さん。毎年12月8日の針供養の式典に皇室の方も参加するため、宿泊できるように

と敷地内に迎賓館を建てた。

「家庭の事情で、それまで住んでいた目黒から11歳の時に母と姉とその迎賓館に移り住んで育ちました」

祖母に可愛がられた大村さん。

「祖母は『この子は世界に行く』とよく言っていました。根拠は分からないですけど（笑）。祖母自身は大きな農家の娘で、女性に教育なんかいらぬ、と言われていた時代のせいもあり、勉強をする事に父親が反対したからか、私が藝大に合格した時すごく喜んでくれて、それからもずっと応援してくれました。『博美ちゃんはお蝶々さんを歌うようになるね』



東京二期会設立70周年記念公演『蝶々夫人』の公演写真 (Photo: Terashi Masahiko) と、大村博美さんのサイン入りパンフレット



祖母・吉井ツルエさんが贈った振袖を着た15歳の大村さんと母・栄子さん



と言ってくれていました」
祖母はその「その日」の為に何枚も立派な振袖を贈ってくれた。
「今でもまだ袖を通していないのもあります。いつか全部に袖を通したいと思っています」

実は大村さん、子どもの頃は歌への関心はさほど高いものではなかった。学友たちが「しろみ（大村さんの愛称）はいつもさえずってるね」と言うほど、

常に歌を口ずさむ歌好き少女ではあったが、むしろ5歳で習い始めたヴァイオリンで音大に行きたかった。

音楽好きの両親のもと「幼稚園の時に姉がピアノを習っていて、友達もみんなピアノだった。でも私は人と違うことがしたかったのでヴァイオリン（笑）」
そのヴァイオリン少女が、なぜ歌に転換したのか。

「高校になって、ヴァイオリンの先生に音大を受験したいと言うと、音大はちょっとどうか、と言われたんです。要するに力不足ということですね。シヨックで落ちこみました。その後に出会ったのが情熱いっぱい声楽の先生だったんです。褒めて育てる先生で、良いところを見つけて褒めて伸ばすやり方が私に合っていたんですね」

「そういえば、祖母の教え方はとても上手だった、と母は私によく話していました。母は幼い頃から、忙しい祖母を助けて働き、大人になってからも和裁学校の副校長として生涯祖母を支え続けた優しく強い女性でした。おばあちゃんの教え方はとても上手でね。ダメです、と言わずに、あ、いいわね、でもこうするともっと良くなるわよ、と良いところを伸ばすやり方だった」と話していました」

祖母と同じように自信を与えながら育てる声楽の先生と歌との出会いは、大きな転機だったに違いない。

東京藝術大学音楽学部声楽科を経て同大学院に進んだ。

「藝大大学院時代の専攻はオペラ科ではなく独唱科。コンサート歌手になれればいいな、と思っていました。いつでもどんな時も、いい声でいい歌を歌える歌手になりたいと思っていました」

その後、歌をさらに極めたい、とイタリアに留学。

「イタリアで生活しているうちに、それまで私の中で眠っていた祖母のDNAが目覚めたようでした（笑）。命がいきいきと生きる喜びに目覚めた感じでした」

自由に自分を表現できるイタリアでの生活が歌の向上に大きく影響したようだ。留学中、イタリア各地のコンクールで入賞。ただ、実力は認められても、なかなか舞台上に立つ仕事は回ってこない。特にイタリアは外国人歌手には閉鎖的な国だと感じていた。「困ったなと思っていたらフランスでチャンスが巡ってきました」
「天の配剤でしょうか。何か岐路に立たされると不思議にうまく道が開けて。ウィーンで受けたベルヴェデーレ国際声



邸宅の庭に立つ在りし日の祖母・吉井ツルエさん
(本誌 No.74 「とくしま人物列伝」より転載)

楽コンクールで入賞したのですが、マルセイユのオペラ研修所の所長が聴きに来ていて、オペラ研修所のオーディションに呼んでくれたのです。オーディションは3日後、と急な話でしたが、すぐにフランスに飛び、オーディションを受けて無事合格。それをきっかけにフランスに拠点を移し、一年間の研修期間を経て、マルセイユ国際オペラコンクールで優勝。フランスのマネージメントがつき、プロのオペラ歌手として活動が始まりました」

欧米豪の歌劇場や音楽祭で『蝶々夫人』をはじめ、難役で知られる『ノルマ』のタイトルロールや、ヴェルディのオペラのヒロインなど、常に主役で招かれて成功を収め、大村博美の名前は世界中のオペラ界に知られるようになる。留学時代にも、世界一流のオペラフェスティバルのひとつであるプッチーニフェスティバル(トッレデルラーゴ)で『蝶々夫人』と

「トスカ」のタイトルロールで喝采を浴びるといって、日本人として初の快挙も成し遂げた。
フランス人のご主人とフランスを拠点に暮らしているものの、1年の大半は公演で世界中を飛び回る。
また、演奏活動と並行して歌の技術・極意を教える活動も精力的に行っている。弟子達がコンクールで優勝、オーディションに合格、など、指導者としても評価が高い。

「今年の2月にはカナダのマニトバ・オペラ50周年記念ガラコンサートで歌い、その後3月はアメリカのニューオーリンズオペラで『蝶々夫人』の出演が決まっています。ニューオーリンズはジャズだけでなくオペラも盛んで、往年の名歌手達が歌っているオペラハウスなんです。とても楽しみです。いつか祖母の故郷、徳島にも歌いに行きたいです！」
(取材・文／北島由記子 写真／永井守)

